

地域における多文化理解の取り組み

～異文化理解セミナー報告 I～

Gehrtz 三隅友子 (徳島大学総合科学部)

misumi@ias.tokushima-u.ac.jp

はじめに

筆者は(財)徳島県国際交流協会と協力し、平成12年10月から12月の約2ヶ月の間に4回にわたる「異文化理解セミナー」を開催した。本稿は、このセミナーの実施に至る経緯及び现阶段の結果を記述するものである。また筆者は徳島大学に平成12年4月に赴任して以来、研究の一貫としてこの活動を始めた。それは、この活動が新しい日本語教育の方向性とも深いかわりを持つと考えるからである。日本国内での日本語学習を「内(うち)と外(そと)の学習」という分け方で考える場合の、これはまさに「外の学習」に相当する。そして学習者の学習環境における「外」の人的リソースという意味で、教師ではない一般の日本人が重要な役割を果たすことはいうまでもないだろう。彼らの外国人(日本語学習者)に対するイメージを知ることをはじめ、また現実の接触において何が起きているのかを、より客観的に観察することを目指している。本研究を進める背景には、たびたび異文化理解のケーススタディとされる、この地域でのある出来事(註1)も存在する。

異文化交流に関しては日本国内においても地域的な格差があり、また多くが閉塞的な状況に直面していることは否めない。いわゆる大都市に比べてまず異文化に触れること自体が、またそこから戸惑いを感じながらもどのように理解または解決していくか等の体験が極端に少ないと言える。この状況は、決して徳島が特別な地域ではないのであろう(註2)。

21世紀を迎え「国際化」から今まさに「グローバルイゼーション」ということばに置きかえられて、様々な人々との共生こそが現在日本に要求されている。その中で地域社会の構成員である人々の意識変化に、大きな期待が寄せられるのも事実である。自分とは違う文化をどのように認識し、受け入れあるいはその存在価値を認めていくのか否かの過程を明らかにすること、また異文化理解教育の方法として何が有効なのかそうでないのかを考える第一歩とするのが本稿の目的である。

1 異文化をどうとらえるのか

1-1 異文化とは ～ 自文化→他文化・異文化→多文化 ～

文化とは、金沢(1992)の定義によれば「人間の相互関係によって生み出され、一つの世代から次の世代へと身につけられて伝えられていく知識、技能、態度であり、その場所や集団に特有のパターン」である。さらにその特徴として黒木(1996)は、①生得的なものではなく、取り巻く環境を学習することによって獲得する ②絶えず変化していて固定的に捉えられない ③政治、経済その他の様々な力関係を伴うことを挙げている。

「外国」をすなわち「自分にとっての異文化」として見るのではなく、それは単に文化間距離が最も大きいとするのである。(図1参照)この最も距離の大きい「外国」と「自分」の間には、家族や学校・職場、地域、職業といった様々な集団が存在する。言い換えれば、自分を離れたところに存在する異なるもの、違うと感じさせるものを異文化ととらえる考え方である。

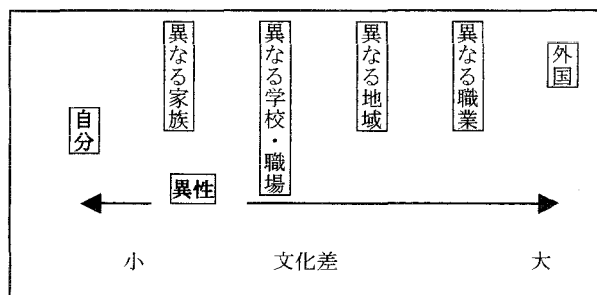


図1 <文化間距離の大小 金沢(1992)>

こうして自分以外から自文化と違うものすなわち他文化の存在が確認できる。自分と違うという意識は、まさに自分と違うものとの出会いによって起こる。数多くの違うものが明らかになるにしたがって、自対他という一対一の対立関係ではなく、様々な違うものの存在は、自分を一とした場合、さらに一対多の関係になりうる。故に人の意識の中では、まさに一つの異なるものから、多数の異なるものとの関係の調整が必要と考えられる。

1-2 異文化接触

前出金沢(1992)は、この違うものとの出会いを異文化接触と呼び、「自らの考え、行動、感情のそれまで疑ったこともなかった前提である価値観や、態度、行動様式、感覚などを調整しないとうまくやっけない事態が頻繁に起こること」と定義している。言い換えれば、文化は空気のようなもので日々の暮らしの中ではその存在に気がつくことはないが、いわゆる「違うもの」と接したときに「違うもの」の存在と同時に「違うものを認める自分というもの」すなわちアイデンティティを認識すると考えられる。例えば、「地域でいわゆる外国人との接触が多ければ、様々な形で異文化接触が起こり、その度にどのように対応していくのかを考え行動する必要性が生じる」といった実際にはもっと複雑な要因が絡んでいるが、異文化接触を理解するモデルとすることが可能である。

1-3 異文化理解の教育が目指すもの

以上の前提をもとに、異文化理解のための学習の可能性を探る。異文化理解の目標としてシタラム(1976)は「異文化間コミュニケーション」ができることという示唆を与えている。自分を取り巻く複数の異なる文化に対して単に理解するだけではなく、その異なる文化に属する人々とコミュニケーションしながら生きられることを彼は強調する。故にこれまでの行動主義的そして人間主義的アプローチも自文化の変容を求めていたこと、またそれが結果的に機能していないことを指摘し、新たな折衷的なアプローチを考えた。すなわち前述の黒木が言うところの、環境から学習し、またその環境自体も変化し続けていることを原因と結果の両方向からとらえ、文化変動は効果的なコミュニケーションの結果であるとしている。

学習の対象としての文化があるのではなく、価値観、習慣といったその他諸々のものの総体とし、この固定化しない文化をそこに関わる者が自ら見出し、相互作用によって調整しなければならないという事態が起こる。そこで学ばれるものは、知識としての文化ではなく、文化に対する構えのようなまさに態度あるいは取り組み方と呼ばれるものであろう。これらは、体験学習の学習循環過程と一致し、またその目標も、知識の蓄積ではなく学び方を学ぶという共通点がある。

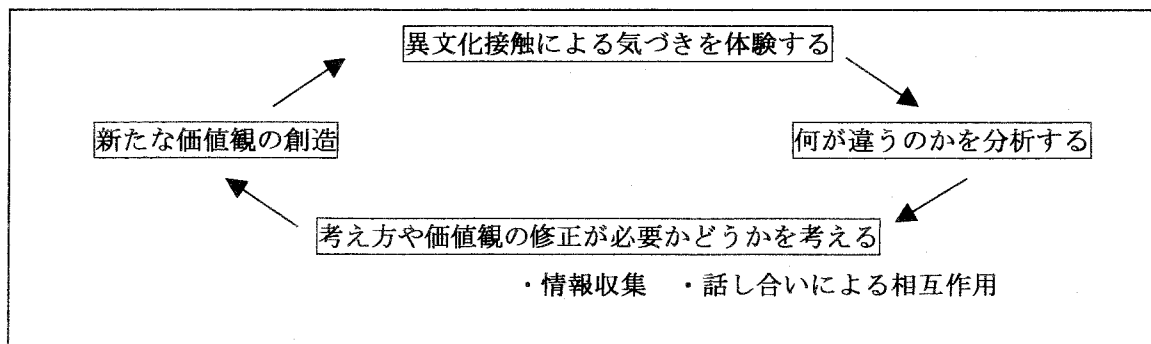


図2 <体験学習による異文化理解の目指すもの>

2 異文化理解セミナー

2-1 異文化理解セミナー各回の実施内容とねらい

表1 <異文化理解のためのセミナーのねらい>

回	テーマ及び活動	ねらい
1	いろいろな外国人の話を聞こう 在住の外国人の日本についての発表を聞き、また小グループに分かれて意見交換をする。	○自分との「違い」に触れ、それを明確にしながら、異文化をつかむ。
2	異文化理解って？ 映画「月はどっちに出ている」を鑑賞後、登場人物の日本での立場をグループで考える。	○日本に存在する様々なマイノリティの立場を認識し、彼らに対する自分の考えを明確にする。
3	中国と言えばウーロン茶？ 中国人による出身地紹介を聞いた後、1対1で会話する。中国が一括りにできないこと、出身地や個人による言葉、文化、習慣の違いに触れる。	○自分の持つステレオタイプや偏見について振り返り、それらはどこから生まれたのかを考える。
4	今、自分に何ができるのか 現在東京で交流活動をしている人から、その方法や内容を聞き、自分たちの地域ではどのような取り組みができるのかを考える。	○これまでの活動から自分たちの位置、そして何が要求されているかを認識する。 ○1回目で考えた自分の異文化を再確認して、「自分」の立場、できることを捉えなおす。

2-2 実施結果

2-2-1 参加者

県の国際交流協会が発行する会報によって参加者を募り、実施前に49名の申し込みがあった。内訳は、女性42名男性7名であり、女性が多く、職業は教職関係者7名・教職以外の公務員6名・会社員5名・医師1名・自営業1名・主婦10名・大学生9名(うち大学院生2)・高校生3名・退職1名・不明6名(協力隊経験者1名)である。居住地域は徳島市内を及び近隣の鳴門市、小松島市、阿南市、石井町である。16歳から70歳代までと職業・年齢ともに多様な参加者が集まった。

表2 <セミナーテーマと参加者>

回・テーマ・実施日	出席者数・参加者	留意点
第1回 いろいろな外国人の話を聞こう 10・29	43名男8 (外国人5名)	申し込み者49名
第2回 異文化理解って 11・19	23名男5	映画鑑賞のため途中退席者数名
第3回 中国と言えばウーロン茶？ 11・26	17名男4 (中国人16名)	各行事と重なり欠席者多数
第4回 今、自分に何ができるのか 12・3	22名男6	4回連続参加者は8名

2-2-2 アンケート

セミナーの目的にもあったように、セミナー内で体験したこと自分のことばで記述することを毎回最終の課題とし、記述の時間を十分に採ったため当日の参加者全員がアンケートに記述している。基本的な質問項目は、○一番印象に残ったこと○嫌だったこと○セミナー(主催者)に対する希望、要望の三つであり、その他に各回の内容に合わせた問いかけを用意した。アンケートを振り返りの場として位置付けた。

3 事例による考察

第1回の「外国人の話を聞こう」では、最初に、徳島在住の外国人5名が「日本に来て感じたこと考えたこと、日本人に言いたいこと」を一人約8分で話した。その中で一人の中国人の発表内容についての感想が一番多く見られた(参加者43名中延べ17名が記述)。以下に事例として取り上げ考察を加える。

〈事例〉 県の中国人国際交流員が、来日後気づいたことの一つとして、徳島の何件かのラーメン屋がその看板に大きく「支那そば」と掲げていることを取り上げ、非常に不愉快であることを述べた。そして、どうして「支那」ということばが生まれたのか、なぜ中国人の自分が不快感を感じるのかを語った。

この日のアンケートの中で、直接この発言に関する(と思われる)記述の一部を以下に原文のまま挙げる。

アンケート項目1 今日一番印象に残ったことは何ですか

- ・支那発言を聞き、私達は中国との関係についてもっと勉強すべきだと思った(女・主婦)
- ・中国は近い国なのに知らないことが多いなあと感じました、歴史にしても現代のことにしても(女・教師)
- ・支那について初めて知りました。これから交流をしていく中で日本の歴史について勉強していかなければいけないなと思いました(女・公務員)
- ・ことば一つにも歴史的な事ながら重なってイメージされ受け取り方によって違いがでること(女・主婦)
- ・支那ラーメンの話(もちろん徳島で「支那ラーメン」という看板を見てとても驚いたんですが)(女・会社員)
- ・支那ってということばを知ったこと(女・高校生)
- ・支那ということばを含め、気づけなかったことに気づいた(女・教師)
- ・〇さんの支那ということばについての話(女・教師)
- ・〇さんが「私は中国人として誇りを持っている」とおっしゃった時に、私達日本人は「胸を張って「私は日本人として誇りを持っている」といえるだろうかとはっとしました。私達は他者に頼る部分が多くて自分に自信がないんじゃないのかと反省しました(女・大学生)
- ・人に伝えたいことがあるときははっきり言うことが説得しやすいこと(女・大学生)
- ・同じ中国の人でも考え方が異なること(女・主婦)
- ・中国の方が二人いて、〇さんは「支那」ということばに対する日本人の意識が許せないという怒りを感じましたが、もう一人の△さんはあまりそう思っていなかった。「中国」という共通項だけですべてをひとくりにしてはいけないと思った。そして日本の他の国々に対する歴史を自分が知らなさ過ぎることを反省しました。(女・大学生)

アンケート項目2 自分と違うなと感じたことは何ですか:

- ・中国の方と、ことばの問題や歴史上の問題等あることが分かりました(女・会社員)

アンケート項目3 家族や友達に伝えたいことは何ですか:

- ・父は支那そばが好きなのですが、きっと〇さんの話されたような背景は知らないと思うので教えてあげたい(女・高校)
- ・中国の人が支那人と言われるのを嫌っている事(女・不明)

アンケート項目4 嫌だったことは何ですか

- ・私達の年代ではあまり過去の問題にとらわれない考えをする人が多いと思う。そのことが悪いと言えるかどうか少し疑問に思う。(女・主婦)
- ・〇さんが「支那」ばかりにこだわっていたことがいやだった、もっと他の話が聞きたかった(女・不明)

話された内容が強い感情を伴うものであったことから、特に印象に残ったことがうかがえる。また不快感を覚える理由が歴史的な事実をもとに説明されたことも、聞き手にいろいろな反応を引き起こす結果となっている。とにかく驚いた人、自分自身が歴史的な事実を知らないということを痛感した人、何気ない言葉の中に人を傷つけているかもしれないと思った人、同じ中国人でも感覚の違う人の存在に気づいた人、日本人を含め自分が非難されたことが嫌だった人、自分が日本人であることをあらためて振り返った人、○さんの立場になったとき明確に他者に自分の意見が伝えられるのかを考えた人、というように気づきのレベルは記述した人の数だけ存在している。

図2の学習過程でいうまさに気づきの段階がここであり、第2段階にあたるの分析へと導くのがこの「記述する」という活動にはかならない。分析から考え方や価値観の修正への段階では、正確な事実としての知識(この場合は歴史的なもの)が必要である。様々な形の情報収集の手段もやはり必要になってくる。この段階で、この問題を関わる複数の人々の中で共有する作業が、最終段階の新しい価値観の創造につながるのであろう。

中国人がこの地域社会の外国人の約半数を占めるという事実とともに、第3回の中国に対する自分のステレオタイプに気づくことを目的とした活動を通して、「支那」ということばをどうとらえるのか、また生活の中でどのように位置付けていくのかを自分自身で判断して行動に伴わせることがまさに求められている。ここでは、参加者の次の行動、もしくは行動に至る思考を調査することはできないが、今後このような問題意識を持つという何らかの変化はあると考えられる。

4 むすびにかえて～今後の課題～

今回の本稿では、「セミナー報告Ⅰ」として、第1回実施の経緯とごく一部の結果を提示するのみに終わった。地域に即した異文化理解のための学習プログラムの有効性を述べるには、セミナー自体を研究ととらえたさらなる取り組みが必要と思われる。このプログラム自体が、まず気づきを起こすこと、そしてそれに対して一方的な一つの答えを用意するものではないこと等、評価のありかたも検討しなければならない。

このセミナーでは最終目的として、参加者が何かを起こせることを期待したがそれはまだまだ無理なようであった。註2で触れたように外国人の数がまだまだ少ないこと、交流するための外国人を探している人もいることなどもその理由であろう。主催者側の急ぎすぎた結論が参加者には戸惑いを招いた。共生に直面するというより、生活の一部で接触する可能性がこれからあるという参加者が多いことを痛感した次第である。

全回を通じて、このような体験型のセミナーを多く開いてほしいという意見が多く得られたもの事実である。このうち一番希望の多かった、「1対1で話そう」の活動を2001年2月から3月にかけて再び実施した。各回日本人及び外国人20名ずつ計40名の、3回で約120名の人々の対話をする活動を行った。参加外国人の95%が中国人であった。その中で印象的だったのは、「在住外国人とマンツーマンで話をしてみましょう」の呼びかけで英語話者と出会えると信じていた参加者の存在である。顔ぶれを見て逃げるように帰った人、さらに英語の話せない中国人に対して相手の顔を見ずに英語で押し通す人、拒否を示しながらも最終的には会話を楽しんだ人等が観察された。異文化を憧れの対象とする時期から、異文化を選べず共生が強いられる時期がこの地にも到来するのだろうか。来たものを受け入れまた新たな関係を作っていけるような、そのための準備が必要なのではと始めたセミナーではあるが、いざ必要に迫られたときは準備など必要がないのかもしれない。

文化距離の大きいものを異文化として考えることから始め、徐々に自分を取り巻く距離の小さいとされる異文化へと目を向けていく一つの流れがある。これこそが、日々の生活の中で無視できない自分と異なるものとどのように共生していくのかの出発点となるのではないだろうか。

セミナーでは毎回話し合いの活動が設定されていた。図1の文化距離が一番大きい外国の理解を目指して集まった人々が、最も苦勞したのは参加者同士の話し合いまたは合意形成であったことを多くの参加者が記述している。この地に必要な異文化理解はまさにこの同質と言われている中の異文化に気づくことなのかもしれない。

2001年度は、対象を教育関係者に絞り、いわゆる「総合学習」に異文化理解をどう取り入れていくかを共に考えるセミナーとして実施する予定である。また、文部科学省が社団法人国際日本語普及協会に委託した、日本語教育コーディネータ養成講座との連携も予定している。この講座と本セミナーの両方の参加者として、この地域にどのような活動の可能性があるのかを今後も共に模索検討していきたい。

<本研究は伊藤謝恩育英財団より平成13年度研究助成を得て実施した。>

<註>

(註1) 1994年3月に徳島大学の国際交流会館(留学生のための宿舎)の建築計画が明らかにされたとき、地元自治会が「外国人は信用できない」とし、建物の敷地周囲に約2メートルのフェンスや、照明設備を要求し、その建設が危ぶまれるという事件が起こった。(1994年3月4日及び6日朝日新聞・報道記事、3月5日天声人語)その後この問題は大きく取り上げられ、外国人に対する意識や理解というものに地域差及び個人差があることが浮き彫りになった。マスコミで話題になったことも影響し、何回も話し合いが行われ住民側から特別の設備を伴わない会館の建設にこぎつけた経緯がある。現在は留学生と自治会の交流は活発に行われ、当初騒がれたようなトラブルは一度も起こってない。しかしこの問題に象徴される人々の意識に関しては、異文化に対するステレオタイプ、偏見が根強く存在する。

(註2)徳島の現状

<統計>

県の人口約83万人に対し、在住外国人約4000人、中国人50%、フィリピン人とマレーシア人両方で30%(2000年資料)である。半数の1800人が徳島、鳴門、小松島、阿南の四市に集中している。また留学生数は、県内約160名(2000年資料)で大半が徳島大学生である。学生以外は、企業の研修生が大半を占めている。

<日本語教育の状況>

県の国際交流協会が月曜日から日曜日の午前中に日本語教室を開催、また市の国際交流協会も日本語教室を開いている。また日本語学校は平成12年の秋から開講し現在約70名の大学進学を目指す中国人学生が在籍している。個人教授、及び交換語学学習等の方法でも行われている。

<ボランティア団体>

市や県の国際交流協会を中心に100あまりの団体が交流活動を行っている。都市部に集中しているため徳島市及び鳴門市の中都市部では外国人との接触も多く、郡部との差がある。

<参考文献及び引用文献>

- ・青木保「異文化理解」2001 岩波書店 岩波新書 740
- ・金沢吉展「異文化とつきあうための心理学」1992 誠信書房
- ・黒木雅子「異文化論への招待」1996 朱鷺書房
- ・中野民夫「ワークショップ～新しい学びと創造の場～」2001 岩波書店 岩波新書 710
- ・K.S.シタラム1976 “Foundations of intercultural communication”
「異文化間コミュニケーション」東京創元社 御堂岡潔訳 1998 第6版

異文化理解のためのセミナー

— 地域で共に生きる —

— 外国人を身近に知ろう —

— 私・私達にできること —

第1回目 — いろいろな外国人の話を知ろう —

日時：10月29日（日） 13:00～16:00

内容：いろいろな立場の外国人にそれぞれの日本での体験談や日本人や日本についてどう思うのかについて話してもらい、その後みんなで話し合います。

第2回目 — 異文化理解って？ —

日時：11月19日（日） 13:00～16:00

内容：異文化理解を考える映画を鑑賞します。事前に登場人物を把握しておき、それぞれの役に対する意見や感想をワークシートに記入し、話し合った結果を発表します。

第3回目 — 中国と言えば「ウーロン茶」？ —

日時：11月26日（日） 13:00～16:00

内容：徳島県内には外国人登録総数の約45%にあたる約1,300人の中国人が生活しています。意外と知らない「近隣の大国」の文化に触れてみませんか？

第4回目 — 今、自分に何ができるのか —

日時：12月3日（日） 13:00～16:00

内容：東京都板橋区での地域活動の実例について講師から話を聞きます。その後、今、自分に何ができるのか各自が考え活動計画を立て、問題点などを講師に指摘してもらいます。

参加資格：高校生以上（40名で締め切り・賛助会員優先） 参加費：無料

申込方法：往復はがきに氏名・郵便番号・住所・電話番号・職業をご記入の上9月30日必着で下記までご送付下さい。追って結果を運送いたします。

〒770-0831 徳島市寺島本町1丁目61

Tel 088-656-3303

（財）徳島県国際交流協会 異文化セミナー係

Fax 088-652-0616